稱讃 二一六号

二〇二〇年十二月一日発行

ともかくも あなた任せのとしの暮（まか）（くれ）

小林 一茶

今年も残り一ヶ月となりました。振り返ると年始めから新型コロナウイルスの感染が日本中を、世界中を席巻し、夏は落ち着くかと思いきや、予想の外、収まることもなく、年末になっては、更に重症者、お亡くなりになられる方も増え続け、一時も安心することが出来ないでおられることかと存じあげます。

テレビのCMで「批判より提案を」という言葉が流れます。

新型コロナウイルスの情報を聞く度に、「政府は何をしているのだろう」と批判、愚痴ばかり言っている自分のことを指していると思ってしまいます。

全国のお寺さんでは、インターネットを駆使して、オンライン法話会や研修会を開かれているところもありますが、そのスキルのない私はたまに参加する程度であります。

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺

〒二一一―〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com

COVID-19禍中 お見舞い申しあげます。



佐藤直子さんより大きな梨を頂きました。
ありがとうございます。

当寺では、十二月十三日に報恩講さんを執り行おうと思っております。

この一年、永代経も春秋彼岸会も一応開催はしましたが、やはり不要不急の外出を控えていただくことからご参拝が少なかったことでした夏には、感染対策として、机にシールドを着けたり、スリッパにしたり、換気のためのドアを作ったりしましたが、のんのん法話会」も開店休業中のような感じでした。

報恩講さんだけは、何とかお参りがあってほしいと思っておりますが、ここにきて、感染が拡大しており、いつ緊急事態宣言が発せられてもおかしくない状況になり、報恩講さんもご参拝があるだろうかと心配しているところです。

標記の俳句は、小林一茶さんの晩年の作ですが、お子様を亡くされたこと、家族内遺産問題等々、いろんな悲しみをかかえておられながらまた「としの暮れ」とは、晦日のことでもありましょうが、ご自身の寿命のことも察してのことでもあろうかと思います。

「あなた任せ」のあなたとは、阿弥陀さまのことであり、「任せ」とは、この悲しみを何とかしてくださいというすがる気持ちではなく、阿弥陀さまの大きな温かいお慈悲を味わっておられることをうたっておられるのでしょう。

この年の暮れ、新型コロナウイルスの禍中ですが、阿弥陀さまのご本願にお任せの心持ちでおれたらなあと思うことです。

心はそうで、呉々もお体には、ご用心いただき、新型コロナをはじめ、インフルエンザ・風邪に罹らないように新しい生活様式につとめていただき、ともに新しい年を迎えたいと思います。

御臨末の御書

我が歳きはまりて、安養浄土に還帰すといふとも、和歌の浦曲の片男波の寄せかけ寄せかけ帰らんに同じ。

一人居て喜ばは二人と思ふべし。
二人居て喜ばは三人と思ふべし。。
その一人は親鸞なり。

弘長二歳十一月　愚禿　親鸞　満九十歳

御臨末の御書」と　報恩講の歌」

和歌の浦和の片男波の」で始まる　報恩講の歌」をご存知でしょうか。作詞は黒瀬知圓（一八八六ー一九六一）、作曲は野村成仁（一八七四ー一九四七）です。日曜学校の児童用讃仏歌として一九一五年に発表され、以後、浄土真宗の門徒の間で親しまれています。

報恩講の歌」は五番までありますが、そのうち、一番と二番とは、冒頭にご紹介した　御臨末の御書」に取材しています。

本書は江戸時代末期、一八四七年に出版された　華園文庫」に収められています。ご紹介した内容の前には、親鸞聖人の高弟の一人、性信に対して、間もなく往生を遂げて同信の門徒たちを浄土で待つばかりという趣旨の言葉と、ともにまた会うことのできるお浄土があることを喜び合う、和歌の贈答であります。しかし　御臨末の御書」として広く知られているのは、冒頭にご紹介した親鸞聖人が西念房に遺されたとされる部分でしょう。『註釈版聖典』刊行以前に用いられていた、各種聖典の一部にも収載されており、広く知られていたのです。

心温まる内容ですが・・・

さて、　御臨末の御書」は、心温まる内容ですが、聖人の言葉であると言えるか、難しい問題がいくつかあります。

まず、本書には親鸞聖人の自筆はもちろん、古い写本等がありません。現在のところ、江戸時代以前に遡ることは難しいようです。

また、親鸞聖人自身が　お浄土へかえる　原文では　安養浄土へ還帰す」）と述べられる部分も問題です。つまり聖人は、自身はもともと阿弥陀仏の浄土の住人であったと自覚されていたことになります。しかし、親鸞聖人は阿弥陀仏に照らし出されたご自身の姿を次のように語られています。

はかり知れない昔からいつも迷い続けて、
これから後も迷いの世界を離れる手がかりがない・・・

（『教行信証　現代語版』一七二頁）

これによれば、親鸞聖人がご自身について、浄土からこの世に生まれた者とお考えであったとは思えません。

加えて、親鸞聖人が和歌を詠まれたか疑問があります。実は聖人の和歌として確実視される歌は一つもありません。そればかりか、聖人は数名目・十悪」と呼ばれるメモに、綺語」（うわべだけ美しく飾った言葉）と註記されています（『浄土真宗聖典全書』第二巻、九八五頁、原文片仮名）。聖人は和歌を詠むことに必ずしも肯定的ではなかったと思われます。なお、聖人には多くの和讃がありますが、和讃と和歌とは形式が異なっており、別物です。

残念ながら　御臨末の御書」を親鸞聖人の作とすることは困難です。聖人を巡る種々の伝承が組み合わされて、現在知られている　御臨末の御書」が出来上がったものと考えられています。

心の地盤

しかしながら、　御臨末の御書」は、親鸞聖人を仰ぐ心情が、素直に表現されています。

冒頭の　私はすっかり年老いてしまい・・・原文では　我歳きはまりて・・・」）の部分は、親鸞聖人御消息」第二十六通にある

この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば・・・　（七八五頁）

を思い起こさせます。また聖人が往生されることを　お浄土へかえる」と受け止めていくことも、聖人が法然聖人の往生を仰いで　浄土に還帰せしめけり」　（五九八頁）と示されることに

通じます。御臨末の御書」につながっていく内容が、親鸞聖人の言葉を大切にしてきた人々の間で語られてきたことを思わせます。

さらに、一人で喜べば二人、二人で喜べば三人と思いなさい、という内容は、純朴でありながら心に訴える内容です。親鸞聖人を阿弥陀仏の化身と仰ぎ、親鸞聖人が、そして阿弥陀仏がいつも私とともにいてくださることを示しています。これは、親鸞聖人に導かれて、大いなる心の地盤をいただいた者の述懐です。

御臨末の御書」は、親鸞聖人についての一つの伝承であるかもしれません。しかし、そこに伝えられている内容は、親鸞聖人がまさしく私たちに伝えようとされた、阿弥陀仏の大いなるはたらきなのです。

（『季刊せいてんNo.一二五』より）

私たちの先人の方々は、毎年　報恩講」をお迎えする度に、親鸞聖人が法然聖人をお浄土から還来なさった仏・菩薩と味わわれたように、正しく親鸞聖人を還相の仏・菩薩と尊ばれてこられたのであります。

親鸞聖人を　宗祖」とお呼びしておりますが、これは、ご先祖を崇拝するということではなく、親鸞聖人の御往生　御命日）を期して、阿弥陀さまのご本願のはたらきが私のうえに、あきらかになっていることを、共々によろこんでこられたのだと思います。

報恩講」をご縁として、何回も親鸞聖人の歩みを拝見して、私たちに伝え述べられて来られたことを、ご一緒に学んで参りましょう。

住職）

〈参考〉

親鸞聖人の生涯

（『浄土真宗必携　み教えと歩む』より抜粋）

聖人は承安三　一一七三）年、日野有範の子として京都東南郊外の日野の地で誕生したといわれています。母は江戸時代に　吉光尼」との名も浮上しますが、確実な根拠はありません。聖人は治承五　一一八一）年春、九歳の時に伯父の日野範綱に伴われて、慈円のもとで得度して、範宴と称しました。また聖人の誕生日は旧暦で四月一日、現代の太陽暦では五月二十一日です。これも江戸時代前期より、高田派の学僧普門が唱えたもので、それを本願寺が採用した日付です。

聖人は建仁三　一二〇三）年四月、六角堂の救世観音の夢告を得て、間もなく婚姻したと考えられています。そして恵信尼と結婚し、小黒女房・慈信坊善鸞・信蓮坊　明信・益方　大夫入道有房　道性）・高野禅尼・覚信尼が生まれました。恵信尼は越後介三善為教の娘と考えられています。また、　日野一流系図」には、別に範意　即生）という子息も記されていますが、詳細はわかりません。

なお、室町時代成立の　親鸞聖人御因縁」には九条兼実の娘玉日と結婚したと伝承され、それが先の系図に取り入れられたため、聖人最初の妻は玉日であるという伝承が生まれることになりました。

親鸞聖人は比叡山での二十年間、さとりの道を探求しました。この時期の活動は　恵信尼文書」に　堂僧」　常行三昧堂に奉仕する僧）と確認されるのみです。世俗化する比叡山への失望か、自力の行では煩悩を断ち切れない自己への絶望か、ついに山を下りて、建仁元　一二〇一）年、二十九歳の時、聖人は六角堂で百日間お堂に籠もる参籠を志しました。九十五日目の明け方、聖徳太子が現われて言葉を告げました。そのことを恵信尼文書には記されています。聖人は太子の示現を得て、東山吉水で専修念仏を説く源空聖人　法然聖人）のもとに百日の間通い、ついに阿弥陀如来の本願に帰する身となり、源空聖人門下に入りました。

源空聖人は当時六十九歳で、専修念仏に帰依してすでに二十六年が経過していました。源空聖人は、建久九　一一九八）年に九条兼実の求めで『選択本願念仏集』を著わして、その念仏の教えは貴族や武士、そして民衆に広がっていました。

門下での親鸞聖人は、四年後『選択本願念仏集』の書写と　源空影像」　肖像画）製作を許される高弟となっていました。比叡山などから強い批判を受けていた源空聖人でしたが、元久元

（一二〇四）年、比叡山の衆徒が源空聖人の念仏を停止する決議をしたため、七箇条の制誡」を書いて専修念仏者の自戒を記し、これに一九〇人

の門弟が署名しました。親鸞聖人は僧綽空」と署名しました。さらに翌年、興福寺が九箇条を書き留めて興福寺奏状」、専修念仏の停止を朝廷に訴えました。そして後鳥羽上皇の女房が別時念仏に出かけて出家する出来事を契機に、上皇により健永二（二〇七）年二月、専修念仏の停止を命じられ、安楽房などの弟子が死罪、源空聖人と親鸞聖人は讃岐（香川県）と越後（新潟県）へそれぞれ配流にされました。（「承元（建永）の法難」）。聖人は、藤井善信という俗名をつけられ、妻の恵信尼ら家族とともに越後に赴きました。

この流罪について聖人は、『教行信証』（『顕浄土真実教行証文類』）のなかで、主上臣下、法に背き義に違し、忿りを成し怨みを結ぶ。これによりて、真宗興隆の太祖源空法師ならびに門徒数輩、罪科を考へず、猥りがはしく死罪に坐す。あるいは僧儀を改めて姓名を賜うて遠流に処す。予はその一つなり。しかれば、すでに僧にあらず俗にあらず。このゆゑに禿の字をもって姓とす」（『註釈版聖典』四七一～四七二頁）と記しています。聖人は後鳥羽上皇の不当な専修念仏弾圧を批判するとともに、もはや国家の繁栄を願う僧ではなく、また、世俗に迎合する「俗」でもないことを表明されました。

ただ親鸞聖人にとって流罪生活が、民衆世界への深いかかわりをもつ契機となり、宗教体験、思索を深めるうえで大きな役割を果たしました。事実、聖人の思想の集大成『教行信証』は、関東在国中に執筆が開始されています。聖人は建暦元（二一一）年、赦免のあとも越後にとどまり、建保二（二一四）年、常陸（茨城県）に向かいました。関東への移動ルートは「恵信尼文書」のなかに上野国佐貫（群馬県）がみえる程度で、これ以外は定かではありません。

聖人は常陸を中心に伝道につとめました。聖人の門弟の名前を記した『親鸞聖人門侶交名牒』があります。常陸二十・下総五・下野五・武蔵一・陸奥七・越後一・遠江一・京都八・合計四十八人の門弟が記載されています。名簿の外にも手紙などにも三十人はどの名が記されており、さらにその門弟のもとに集う門徒がいたので、かなりの門徒数になります。

聖人の門弟は、拠点とした地域名を集団の名称としていました。下野国高田の真仏・顕智を中心とする高田門徒、下総国横曽根の性信を中心とする横曽根門徒、常陸国の教念を中心とする布川門徒、順信を中心とする鹿島門徒、善性を中心とする蕗田門徒、武蔵国の光信を中心とする荒木門徒、下総国の常念を中心とする佐島門徒など、聖人は、念仏の教えに集う人びとを同朋といい、門徒は信心の集団（教団）をつくり出したのでした。

聖人は関東での伝道活動を門弟にゆだね、嘉禎元（二三五）年頃、京都へ帰洛します。京都での聖人は子息善鸞による念仏のまちがった伝授で、関東門弟の動揺がおこり、善鸞を義絶するなど、悲痛な事件もありました。聖人は、関東時代に執筆をはじめた『教行信証』を、京都でも改訂を続けるなど、晩年、著述活動に力をそそぎました。

聖人の著作は多数に上りますが、宝治二（二四八）年七十六歳のとき『浄土和讃』『高僧和讃』、建長二（二二五〇）年七十八歳のとき『唯信鈔文意』、建長七（二二五五）年八十三歳のとき『尊号真像銘文』（略本）『愚禿鈔』『皇太子聖徳奉讃』、正嘉二（二二五八）年八十六歳のとき『正像末和讃』、文応元（二二六〇）年八十八歳のとき『弥陀如来名号徳』などを精力的に書きました。

聖人は、弘長二年十一月下旬から体調をくずし、ついに二十八日、三条富小路の善法坊で示寂しました。現在の暦では一二六三年一月十六日にあたります。聖人の臨終には、覚信尼と益方入道（道性）の肉親とともに、門弟の遠江池田の専信や顕智らも立ち会いました。僧にあらず、俗にあらず」「愚禿」を貫いた九十歳の生涯でした。

親鸞聖人御誕生八五〇年
立教開宗八〇〇年 慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

名号とは何か

出雲路 修氏

大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。

「仏」

仏教では、仏（目覚めた者）と成ることがめざされる。その到達点である目覚めの境地・仏のさとりの境地は、人間の認識を超え言語を超越したものとされた。

言語を超越し人間の認識を超えたところに仏はk屹立する。

親鸞においても

如来、清浄ノ真心ヲ以テ円融無碍不可思議不可称不可説ノ至徳ヲ成就シタマヘリ。

仏は、清浄の真心で円融・無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就した。）

（『教行信証』信巻）

とあるように、仏の境地は「思議」「称」「説」を超越して捉えられていること、いうまでもない。思惟や言語を超越したところに仏の境地がある、とされたのである。

しかし、僧肇（そうじょう）（三八四～四一四）の『羅摩詰経序』（『出三蔵記集』）に

然群生長寝、非言莫暁、
然レドモ群生長ク寝タリ、言ニ非ラザレバ暁ルコトナシ。」

長い眠りにある衆生は、言語によってはじめて目覚めるのだ。）

とあるように、迷いの生死をくり返している衆生が仏を理解するには、まさに言語によらなければならない。仏の境地は、言語表現されてはじめてわれわれに理解されるのだ。

「名」

親鸞は、言語を超越し人間の認識を超えた仏が、人間の認識の世界へ（な）名）」として現われ来ることを、つぎのように描いている。

仏性すなわち法性なり。法性すなわち法身なり。法身は、いろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず、ことばもたへたり。この一如よりかたちをあらわして、方便法身とまふす御すがたをしめして、法蔵比丘となのりたまひて、不可思議の大誓願をおこしてあらわれたまふ御かたちおば、世親菩薩は尽十方無礙光如来となづけたてまつりたまへり。

（「仏性」はすなわち法性である。法性はすなわち法身である。法身は、色もなく、かたちもない。だから、こころも到達することができず、ことばも絶えてしまった。この一如の真実界よりかたちを現わして、方便法身という御すがたを示し現わして、法蔵比丘」と名のり、不可思議の大誓願をおこして現われたかたちを、世親菩薩は尽十方無礙光如来（阿弥陀仏）と名づけたのである。）

（『唯信鈔文意』）

この一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となのりたまひて、無碍のちかひをおこしたまふをたねとして、阿弥陀仏となりたまふがゆへに、報身如来とまふすなり。これを尽十方無礙光如来となづけたてまつれるなり。この如来を南無不可思議光ともまふすなり。この如来を方便法身とはまふすなり。方便とまふすは、かたちをあらわし御なをしめして、衆生にしらしめたまふをまふすなり。すなわち阿弥陀仏なり。

（この一如の真実の宝海よりかたちを現わして、法蔵菩薩と名のって無碍の誓いをおこしたことを因として阿弥陀仏となったので、報身如来」という。これを尽十方無礙光如来と名づけたのである。この如来を南無不可思議光仏ともいう。この如来を方便法身という。方便」というのは、かたちを現わし御名を示して、衆生に知らせることをいうのである。すなわち阿弥陀仏である。）

（『一念多念文意』）

毎月 親鸞聖人を知ろう」を掲載します 親鸞聖人が生きた時代の社会のあり方などを通して親鸞聖人のご生涯を訪ね少しでもそのご遺徳を感じれたらと思います

人間の認識を超えた仏が人間の認識の世界にもたらされる。「かたちをあらわし・なのりたまひて」（かたちをあらわし御なをしめして」とあるように「な（名）」として、すなわち言語として、「かたち」のない仏は人間の認識の世界にもたらされる。それが「阿弥陀仏」なのだ。

言語を超越し、決して言語表現されることのない仏の境地」が言語表現されたのが「阿弥陀仏」なのだ、と説かれる。仏とわれわれをへだてる深淵に架橋される言語表現が「阿弥陀仏」である、ということである。

だが、人間の認識を超えた仏がいったいどのようにして言語表現され、「名」として人間の認識の世界にもたらされるのか。

如来ノ功徳ハ仏ノミ自ヅカラ知セリ。タダ世尊マシマシテヨク開示シタマフ。

仏の功徳は仏だけが知ることができる。仏だけがそれを人びとに示すことができる。）

（『教行信証』信巻、『無量寿如来会』巻下）

とある。仏の境地は仏によってのみ言語表現されるのだ。仏であるからこそみずからの境地、仏の境地を言語表現できる、ということである。

この言語表現は、

大行トイフハ、スナハチ無礙光如来ノ名ヲ称ズルナリ。

仏の偉大なる行とは、無礙光如来（阿弥陀仏）の名を称えることである。）

（『教行信証』行巻）

とあるように、仏による行為（大行）」である。

阿弥陀仏」を述べること、言語によって仏を表現することは、われわれの日常の言語を超えた、仏によってはじめてなしうる行為（大行）である。

仏の「名」は仏によってはじめて称えられる。仏みずからによる仏の境地の言語表現である。これが「仏の名号」である。

名を聞く」

聞く」という地点に、親鸞の「信」は成立する。

聞其名号」といふは、本願の名号をきく、とのたまへるなり。きくといふは、本願をききてうたがふこころなきを「聞」といふなり。また、きくといふは、信心をあらわす御のりなり。

（聞其名号」というのは、本願の名号を聞く、というのである。「聞く」というのは、本願を聞いて疑う心のないのを「聞」というのである。また、「聞く」というのは、信心を表現する言葉である。）

名号」を「聞く」、そこに「信」が成立する、とされる。その「名号」「名」こそ仏によって称された「名」、仏みずからによる仏の境地の言語表現、である。

十方恒沙ノ諸仏如来、ミナ共ニ無量寿仏ノ威神功徳不可思議ナルヲ讃嘆シタマフ。アラユル衆生、其ノ名号ヲ聞キテ、信心歓喜セムコト乃至一念セム。至心ニ回向セシメタマヘリ。彼ノ国ニ生ゼムト願ゼバ、スナハチ往生ヲ得、不退転ニ住セム。

十方恒沙のすべての仏はみな、無量寿仏（阿弥陀仏）の威神功徳の不可思議であるのを讃嘆している。すべての衆生は、仏によって称えられた名号を聞きて、信心歓喜すること乃至一念であろう。無量寿仏（阿弥陀仏）は至心に衆生に回向しているのだから。無量寿仏（阿弥陀仏）の国に生まれようと願うならばその時に、ただちにその国に生まれることができ、不退転に住するのだ。）

（『無量寿経』巻下）

信」とは、われわれが日常に用いる意味での「信」ではない。親鸞の用語としては、「真実」といったほうがわかりやすい。自己において真実が成立するということである。

みずからの境地を言語表現する仏。

言語表現された仏の境地「阿弥陀仏」という表現を、「聞く」ことによって仏の「真実」を自己に確立するわれわれ。

言語表現をおこなう者とそれを聞く者とは、同じ地平に立つのである。

南無」

名号は「なむあみだぶつ」のかたちで示される。現代では「なむあみだぶつ」とされること

が多いが、親鸞の時代には　なもあみだぶつ」と読まれた。南無阿弥陀仏」は、南無」と阿弥陀仏」とのふたつの部分より成っている。

南無」とは何か。　阿弥陀仏」とは何か。

南無」も　阿弥陀仏」も、単に発音を示すためだけに感じが用いられている。たとえば　南無」は　南方」や　無い」といった意味にはまったく関係ない表現であって、namoという発音を示しているだけである。

南無」についていえば、　信順する」　敬礼する」といった意の語、サンスクリットのnamoの変化形のひとつがnamoである。中国では、そのnamoという発音を表わすために感じをあてて　南无」とした。

无」の音は　む」である。だが、　无」には　む」の音とともに　む」の音もあるので、　なも」とも　なむ」とも読まれ、さらにさまざまな漢字があてられた。

namos namo）は　信順する」　敬礼する」といった意であり、この語のあとに信順の対象・敬礼の対象を示す語がつづけることが多い。　南無阿弥陀仏」は、　南無」という語のあとに信順の対象・敬礼の対象である　阿弥陀仏」という仏の名を続けたもの。　阿弥陀仏」を敬う気持ちを表わしたものなのだ。

阿弥陀仏」は、Amitāyus-buddha　限りなき命の仏）とAmitābha-buddha　限りなき光の仏）との、二つの意味を含んだ名をもつ仏である。親鸞の場合、　尽十方無礙光如来　すべての方向に遮るもののない光の仏）」　不可思議光仏　大間の認識を超えた光の仏）」といった　光」のイメージをもった訳語のかたちで用いることが多い。親鸞は　真実」の世界を　光」のイメージで叙述するのである。

南無阿弥陀仏」とは、　限りなき命の仏・限りなき光の仏に帰順する」という意である。namos namo）の訳語としては　帰命」ということばが用いられることが多い。　帰命」は、　命」を生命の意に解して　信順する対象に自己のいのちを帰趣させる」意とされたり、　命」を命令の意に解して　信順する対象の命令に帰順する」意とされたりする。

親鸞の場合は、　帰命」の　命」は命令の意として解された。

南無阿弥陀仏」

南無阿弥陀仏」は、親鸞においては、ふたとおりの把握がなされる。

まず、

是ヲ以テ、　帰命」ハ本願招喚ノ勅命ナリ。だから　帰命」というのは、本願からの、われわれを呼び寄せる命令である。）

（『教行信証』行巻）

は、　阿弥陀仏に南無せよ」（勅命」）として把握したもの。仏から衆生へのはたらきかけ・呼びかけとしての　南無阿弥陀仏」として把握したもの。

つぎに、

言南無者」というは、すなわち帰命とまふすみことば也。帰命はすなわち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがひてめしにかなふとまふすことばなり。

（『言南無者』というのは、　帰命」ということばである。帰命は、釈迦牟尼仏と阿弥陀仏の二尊の命令にしたがって召喚に応じるということばである。）

（『尊号真像銘文』）

は、　阿弥陀仏に南無す」（勅命に遵ひて召しにかなふ」）として把握したもの。衆生から仏への応答としての　南無阿弥陀仏」として把握したもの。

仏から衆生へ　阿弥陀仏に南無しなさい」とはたらきかけ、呼びかけ、衆生が仏に　阿弥陀仏に南無します」と応答する、という、仏と衆生との関係が、　南無阿弥陀仏」という表現に込められている。仏と衆生とのそのような関係が成立する　場」が、　南無阿弥陀仏」という　名」である。

われわれが仏に応答して称える　南無阿弥陀仏」は、　阿弥陀仏に南無します」という意なのだが、それを　阿弥陀仏に南無しなさい」という仏からの呼びかけとして聞きとる人に　信」が成立する。そこに　名号」としての　阿弥陀仏」が成立する。

仏とわれわれとの呼びかけ・応答の　場」としての　南無阿弥陀仏」である。



稱讃寺　行事予定

二〇二〇年　十二月の行事予定

六日（日）日曜礼拝　午前七時
門信徒の集い　午後二時
三日（日）日曜礼拝　午前七時
親鸞聖人報恩講
午前十一時～正午
午後一時半～午後二時半
六日（水）のんのん法話会　午後一時
二〇日（日）日曜礼拝　午前七時
二六日（土）親鸞聖人を知ろう　午後一時
二七日（日）日曜礼拝　午前七時
※日曜礼拝の時間を午前七時に繰り上げたいと思いますので、お時間がございましたら是非、ご参拝ください。



生かされて
過ぎゆく年に
ありがとう

二〇二〇年　心のともしび」十二月カレンダーより

稱讃寺
宗祖親鸞聖人
報恩講　ご案内

今年の「報恩講」さんは、左記の通り、法要（おつとめ）を二回に分けて厳修いたします。ご都合のつく時間帯にご参拝賜りますよう宜しくお願い申しあげます。

記

期日〉十二月十三日（日）

日程〉

一一：〇〇　おつとめ
『宗祖讃仰作法』（音楽法要）
一一：四〇　法話（住職）
一二：〇〇　み仏にいだかれて
一二：三〇　おつとめ
『正信偈』（行譜・六首引）
一三：一〇　法話（住職）
一三：三〇　恩徳讃

編集後記

「朝日新聞」十一月二十一日の「折々のことば」に次のことが掲載されておりました。コメントは、哲学者の鷲田清一氏です。

自分の力ではどうしようもないことがあったとき、むかしの人たちは、おまじないをとなえてきました。

中脇初枝

まじゃらくまじゃらく」「ととーしーとーしー」「ちちんぷいぷい」・・・と、災害や病苦に怯えて思わず唱えるおまじないが各地にいろいろ伝わる。天にすがるというより、その音調にのせられ、怖くても一人じゃないよと誰かに言ってもらっているような気持ちになる。絵本『つるかめ　つるかめ』（絵・あずみ虫）のあとがきから。

幼いとき、転んで泣いていたら、お母さんから「いたいの　いたいの　とんでけー」と唱えてもらったことを思い出す方もいらっしゃることでしょう。何の根拠もないのに、痛みが取れた気分になれるのは、鷲田氏がおっしゃる「一人じゃないよ」と寄り添ってくださる方を肌で感じたからでしょう。おまじないに効果があるわけではないのです。この時期、誰もが不安の中で過ごしております。おまじないなど、他の力に頼りたくなります。「南無阿弥陀仏」のお念仏は、おまじないではありません。しかし、阿弥陀さまが　私はいつも、ここ、あなたの傍にいますよ。安心してくださいね」と呼び続けてくださっているみ声であり、「世の中安穏なれ、皆に本願が届いて」との〝いのり〟と味わいたいです

二〇二〇年度　稱讃寺門信徒会費

年会費　六千円
振込先　城北信用金庫　一ツ家支店
名　義　浄土真宗本願寺派　稱讃寺教会
　　代表　北村　信也
口　座　普通　６１７６０５１